

安曇野市の土地被覆の変遷と地区別緑被構成の分析

平成 23 年 2 月 07T03036G 寫津 俊樹

要旨

< 目的 >

今まで、地方都市において、工業化や商業化、また人口増加に伴う都市化が進み、スプロール化やドーナツ化現象が起こってきた。それに伴い森林等の緑地が減少、孤立化が発生してきた。緑地は地球環境の保全はもちろん、レクリエーション等の用途のために保全が必要である。緑地の利用を計画し、保全していくためには、緑地の減少や孤立化を把握していく必要がある。さらに、緑地の連続性に関して、生態系、景観の視点から重要であると言える。本研究では、地方都市である長野県安曇野市を対象に 1995 年と 2008 年の土地被覆を分析し、その間の変遷を調べ、地方都市がどのような変遷を遂げているのかを分析する。また、2008 年の緑地の連続性を地区ごとに分析し、地区ごとでどのような特徴が見られるかを調べた。

< 方法と特徴 >

地球観測衛星を利用し、1995 年と 2008 年の画像を使用したリモートセンシングにより、土地被覆分類図を作成した。分類図を用いて、その期間の土地被覆の変遷を調べた。次に 2008 年の緑地の連続性を分析するため、指数 CON と緑被パッチといった指標を用いて評価を行った。これら 2 つの指標を、安曇野市対象範囲全域と 83 地区別で調べ、83 地区別にはクラスター分析による分析を行った。

< 結論 >

今回作成した土地被覆分類図から工場、大型小売店舗、宅地の増加による市街化で、スプロール化が起こっていた。中でも工場の誘致が今後も予想され、計画性のない乱立を防止する必要がある。一方で公園緑地が増加傾向にあることがわかり、今後もこのような緑地増加に繋げていくべきである。また、中心市街地に緑地が少ないことがわかり、中心市街地の緑化も今後図っていくことが重要である。

次に、2008 年における緑地の連続性の評価では、連続性のある緑地も多く見られたが、スプロール化により、緑地が分断している場所もあることがわかった。今後、緑地の連続性を保持するとともに、持続性のある都市計画が望まれる結果となった。

指導教員 藤居 良夫 准教授